みどり保育園

ほけんだより

2月 2024年

おゆうぎ会では、子どもたちの演技のすばらしさに感動し子どもたち の成長を感じました。それと同時に一人もお休みがなかったので安心し 嬉しかったです。保護者様のご家庭での健康管理と子どもたちへの励ま しがあったかだと思います。

2月に入り立春とは言え、寒さは続きます。引き続きウイルス、細菌感 染への感染対策に心掛けて、快適な保育園生活が送れますようご協力お 願いします。みどり保育園の増築も終わり、保育空間が広がり、子ども たちも、のびのびと生活しています。

1月のみどり保育園の子どもたちの健康状態

発熱 6名 早退 2名

咳 11 名

喘息 1名

鼻水多数

下痢、軟便 3名 便秘

とびひ 1名

子どもの成長に必要な『遊び』



「遊び」は、子どもの脳の発達や心の成長過程に入りな思味で付つしい ます。「遊び」は、学びと成長の原点

かけっこや木登り、体をたくさん使って遊ぶと運動能力を高めるととも に好奇心と探求心にあふれ脳の知的な発達に影響をもたらします。同じ 年代の子ども同士で遊ぶと共感や役割分担など「仲間関係」も芽生え、 心や体が発達し社会性情緒面、それから我慢する事など、遊びを通して 生きるために必要な能力を身につけます。

ダメダメよりもチャレンジ精神を育てましょう

2、3歳頃からお手伝いをしたくなります。じゃまをしたり、失敗して叱 ってしまうと、子どもは罪悪感を持ってしまいます。ネガティブな精神 状態にならないよう、大きな心で何度でもチャレンジさせてあげましょ

う。できた時には「よく頑張ったね」とほめてあげます。

たくさん遊ぶことが人生を支える基礎に

「遊び」子どもの脳の栄養

子どもの遊び方で発達の問題が見つかることもあります。

子ども同十の遊びの中に、人と仲良くする方法や社会で上手に生きてい くヒントがいっぱい詰まっており大人になって役立ちます。

けんかをしても仲直りできるコミュニケーション能力や友達を助け合 う協調性、役割と責任を理解し共感することを学びます。

遊びのポイント 自然に触れる 自由に遊ぶ時間を持つ ごっこ遊びで楽しく

子どもの体の発達に沿って取り組みたいあそび

3~6ヶ月・・腹ばい 見る 触れる 音を楽しむ

6~12ヶ月・・ハイハイ いないいないばあっ! ブロック

1~1歳半・・散歩 一人遊び 手遊び

1~2歳・・・散歩 つみき シール貼り お友達と一緒に

2~3歳・・・かけっこ 追かけっこ ごっこ遊び

3~4歳・・・ジャングルジム ブランコ シーソー

4~5歳・・・操作遊び 水 プール遊び マット運動

5歳以上・・・竹馬 ホッピング こま回し 鉄棒 ルールのある遊び

子どもと接する時、大人目線になっていませんか、子ども目線にな って子どもと接しましょう。

子どもの話を聞く大切さ

子どもの話に耳を傾けよう

きょう、少しあなたの子どもが言おうとしていることに耳を傾けよう きょう、聞いてあげようあなたがどんなに忙しくても

さもないと、いつか子どもはあなたの話を聞こうとしなくなる。 子どもの悩みや要求を聞いてあげよう。

どんなに些細な勝利の話も、どんなにささやかな行いもほめてあげよう。 おしゃべりを我慢して聞き、いっしょに大笑いしてあげよう。 子どもに何があったのか、何を求めているのかを見つけてあげよう。 そして言ってあげよう、愛していると。

毎晩毎晩。

叱った後は必ず抱きしめてやり、「大丈夫だ」と言ってやろう。 子どもの悪い点ばかりをあげつらっていると、そうなってほしくないよ うな人間になってしまう。

だが、同じ家族の一員なのが誇らしいと言ってやれば、子どもは自分を 成功者だと思って育つ。

きょう、少し

あなたの子どもが言おうとしていることに耳を傾けよう。 きょう、聞いてあげよう、あなたがどんなに忙しくても。 そうすれば、子どもはあなたの話を聞きに戻ってくるだろう。

ウエイトリー (南カルフォルニア大学客員教授)

子どもは親が言ったようには育たず、親がしたように育ちます

アメリカンインディアンの教え

批判ばかり受けて育った子は非難ばかりします

敵意にみちた中で育った子はだれとでも戦います

ひやかしを受けて育った子ははにかみ屋になります

ねたみをを受けて育った子はいつも悪いことをしているような気持に なります こころが寛大な人の中で育った子はがまん強くなります はげましを受けて育った子は自信を持ちます ほめられる中で育った子はいつも感謝することをしります 公明正大な中で育った子は正義心を持ちます 思いやりのある中で育った子は信仰心を持ちます 人に認めてもらえる中で育った子は自分を大事にします 仲間の愛の中で育った子は世界に愛をみつけます

「アメリカインディアンの教え」加藤諦三 著